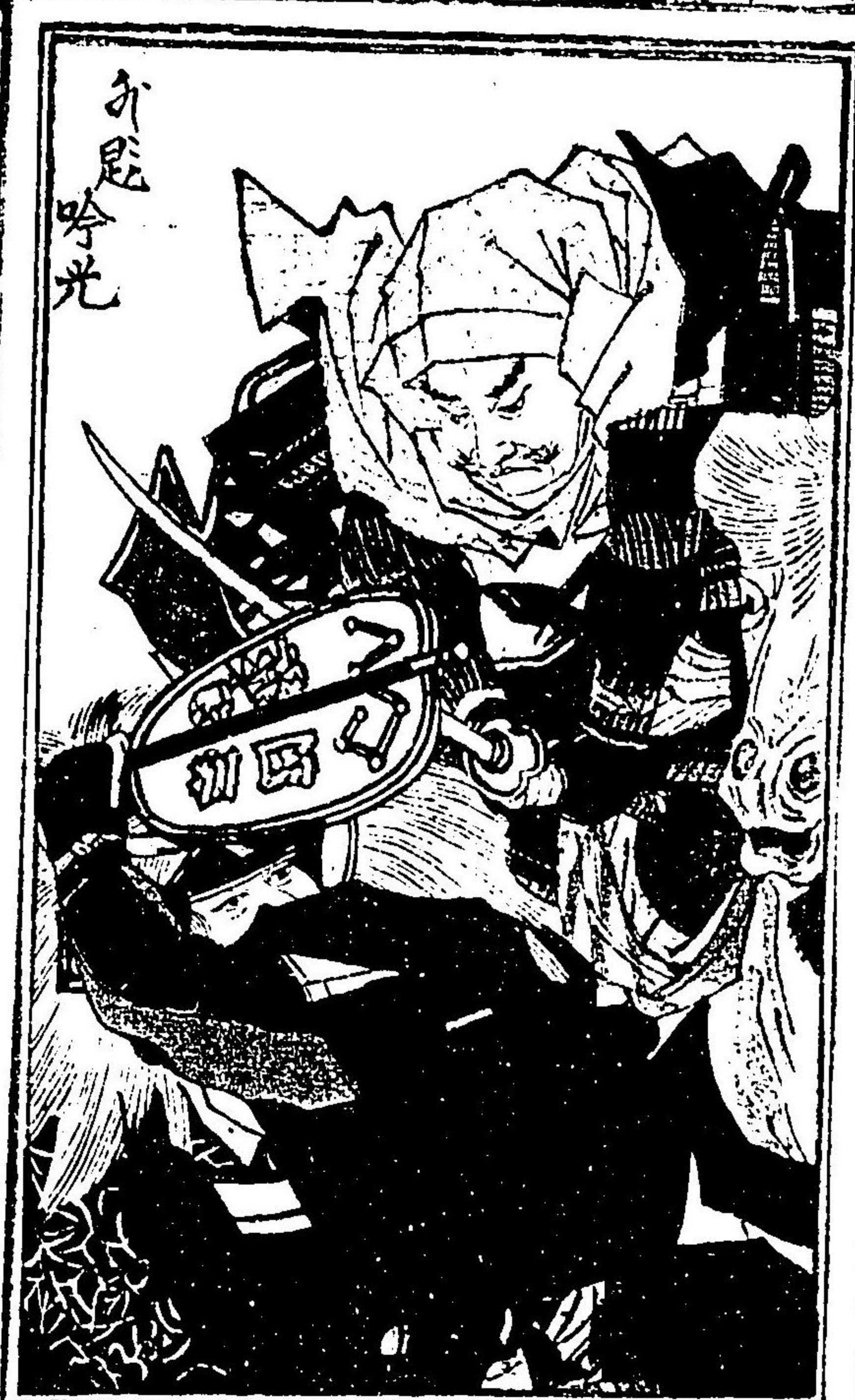


特42

850

實說川中島軍記全
双紙





かくぢや社

金鷲

叙

武田信玄の軍立の堅固あるを以て東海東山に震ひ上杉謙信の戦術の敏捷あるが故に北陸を壓し實に當時の龍虎あり然して兩將の戦ひと交ゆる信州川中島のみにて五箇度及び其結局の如き初て鋒を交へしより既に十五年を経兩將の謀略毫も失なく前後無類の一大激戦とし世人之を評して勝敗を牛角とあす聞者肩と怒らせ腕を撫せざるを得ざるあり茲に於て金香氏も此兩軍へ一鎗入んと筆の穂先を尖らせつ小冊紙中を戰場とあし他の筆隊を向ざる先に早く世上へ魁の功と奏せば版元の勝利疑ひあしと勝餘波めりして第叙に一言をわけると云爾

梅亭金鷲識

實説 双紙 河中島軍記

○ 第一 一回

東京 梅亭 金香 編 次

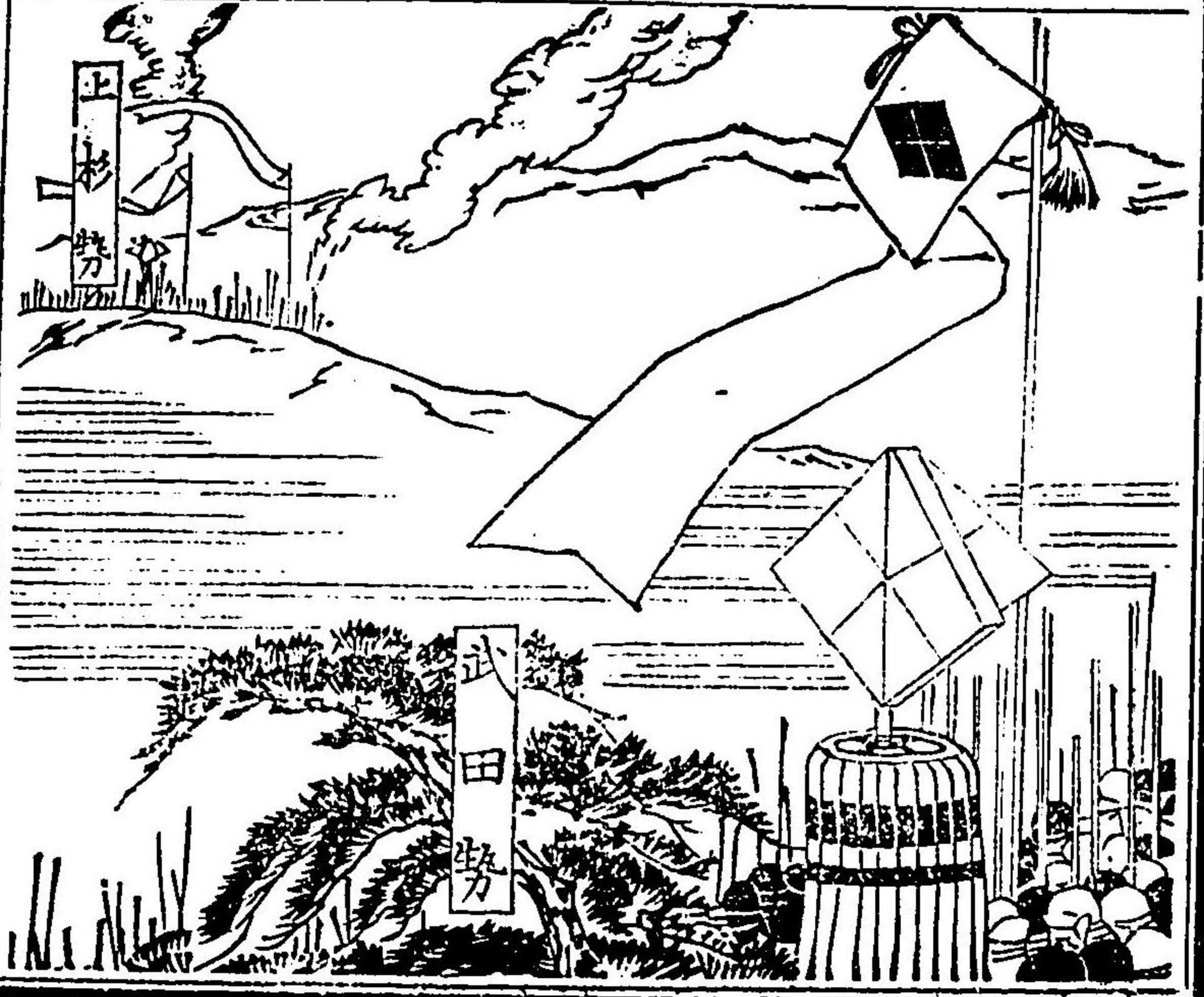
人王百七代正親町天皇の御宇永祿四年に當つて北越の猛將上杉輝正 大弼輝虎入道謙信甲陽の勇將武田大膳太夫晴信入道信玄と信州川中島に於て空前絶後の大烈戦をせし其源をたづぬるに信州葛尾の城主村上左衛門尉義清ある者武田信玄と干戈と交ゆる事數年ありしが曾て天文十六年の秋八月同國上田原の一戦お大敗して其居城に叛る事あたはず故に越後に奔りて春日山の城主上杉謙信に謁し其武威を借て信玄と討ち先日の前を雪めん事と乞ふ謙信其時の長尾平三景虎と号して年漸く十八才ありけるが其心の程を察しやり異義なく許諾て義清を舍匿おり同年十月自ら信州へ出馬あり海野平に於て武田勢と戦端を開きしより以來永祿四年お至るまで十五年の間合戦屢なりといへども更に勝敗を分たざりけりさる程に謙信故ありて上洛せまく欲しなるにぞ先信玄は使者を送りて我上洛の間戦争を休みた

まはりたしと申入れけるに信玄直ち承引
 けれバ謙信喜びてこれと謝し堅く約して上
 洛なせしに信玄其盟を破て伊豆の北條氏康
 の頼と應じ上杉が領城鶴ヶ嶽に押し寄せ是
 を攻落しぬ此由越後より京都お注進しなれ
 ば謙信聞て大ひに怒り憎き信玄の振舞かな
 咄哉一戦のもとに彼の法師首を打落しけれ
 んと速かに飯國おし永祿四年八月上旬に柿
 崎和泉守景植本庄越前守繁長須田右衛門尉
 親滿柴田周防守治時山吉玄蕃允親章北條安
 藝守長朝宇佐美駿河守定行直江山城守兼繼
 甘糟近江守景時村上左衛門尉義清と始先勇



將猛卒すべて壹万四千余騎と將て信州川中島に出軍をし犀川筑摩川を渡りて西條山お陣したり此由海津城の郡代高坂彈正忠昌信より甲府へ聞え上げられ信直直ちに馬ありしが昌辰甘利左衛門尉晴吉佐奈多一徳齊幸隆諸角豊後守昌清山本勘介入道道鬼相木市兵衛等とこしめ總勢二万人あり雨宮の渡り陣をかまへ越州の通路と塞ぎ密かに間者をもつて上杉が陣中の様と窺ひせけるに其將卒一同大ひに憂ひてあるにも係りらず獨り大將謙信の聲く色あく泰然としてありとに信直諸將を集へて其意見を問ふ時に山本道鬼すゝみ出で謙信のさねくの怨恨お堪かぬ此度の是非烈しき合戦いたし雌雄を一擧に決せんと露砂背氷の謀畧を用ひたりと思えしよつて我軍此處をしりぞきて海津お入るに謙信兵を引て飯國仕べし其時精兵を飯路に伏せ置さば前親しく上杉をまつて逆へ戦ひ其酣なる頃に至り伏兵起つて之を撃つ勝利ある事疑ひなからんと存するありと云ひければ信直夫が言葉に従がひ雨の宮の陣を去て海津城に入るされども上杉の勢未だ陣とひかず依て山本道鬼また信直お言上しけ

るにの察する處謙信我が變をまつて己れが軍勢を動かさず然れば彼方より軍を發せざる先に此方より戦ひを仕掛んこと上策おひめ然して夫が謀畧の軍勢と二隊におし一隊をもつて西條山なる敵陣を攻め又一隊の路に待うけ謙信勝敗によらず兵をひき取て本國お飯りしん夫が隙をうかひ前後より引包んで攻撃を勝ざることおらずやのと言ければ信直其方の申す處誠に理の至極にして予が意あなへりとして高坂彈正忠昌信飲富兵部少輔虎昌馬場民部少輔景政甘利左衛門尉晴吉等を一万二千の兵お將ど一夜



に乗じて西條山ふむかいしめ親から八千余兵を卒して夜半に城を出で河中島ふ至り廣瀬を渡つて屯しけり

○第二二回

爰に又上杉謙信の西條山にあつて敵陣に焰氣の立上るを伺ひ見つ諸將を顧て謂へらく我信を戦ひを挑む事幾んど十五年然れども彼一度も其計を誤らざりしが今はじめて是を失せり其仔細を曰いんに必定明日敵戦ひを始むるあるべし然して其策を察するは軍勢を二手にわかし一手の此方へ寄せ來り一手の道にまちて我が軍の退く處をうたん企てにあらんずらん其証の敵陣を見よ飯煙兩度立上れり咄あつつき法師が首と鋒にかけて日頃の怨をばらすの此時あり各出陣の用意せよ馬の轡をしぼり舌をまさて嘶なさせそ軍勢の枚を含ませて音なさせそと堅く令し頼て支度をととのへて陣中に故慮と大籌とたかせ其夜亥の上刻は西條山を登し兩宮の渡の川上なる八代の渡りを越え河中島へぞ出にける時は永祿四年九月十日東方既に白あんとするに頃しも秋の末あれは朝露ふかく立あめて咫尺の間も

見へわかす爲は武田が斥候の兵等も上杉の進軍を知り由あかりなり卯上刻に及びて朝嵐やうやく霧を吹晴しければ遙か彼方を見やるは南方の廣原に上杉が兵ども一万三千余大根の折掛の纏を真先におし立て旌旗鎗刀篠の如くつらね軍備整然としてありければ武田勢一同大ひに驚き白みかへつて見えたりけり流石の信立も仰天せしが少しも動せず浦野源之丞諸我入道等に命して敵状を候いしめ山本道鬼と計つて備をさだめ隊を分ち敵の進撃をまつ程なく上杉勢の先鋒柿崎和泉守が手の兵二千余人鉄富三郎兵衛内



藤修理正が備に闘をひげて打かゝれば、飲富大音よ是ぞ大事の戦ひなれば必ずおくれなとり
 る力弱らば討死せよ一足も退くると下知あしつゝ自から敵に當りて奮闘す是に闘まされ將
 卒共に死力をふるつて戦ふほどに上杉勢もせめぬぐんで見えたりける時に其陣將北條安
 藝守本庄 越前 守の二頭左右より廻り來り飲富内藤が隊をさし挿み矢石を飛ばし刀槍を晃か
 し無二無三に打込みにければ遂に内藤修理が備七裂八載に崩れて敗走す飲富三郎兵衛が勢
 も既に危く見えしが三郎兵衛の限り士卒と闘ましつ踏堪えてぞ防戦しける爰にまた武田
 方武田左馬介信繁(信玄の弟)諸角豊後守昌清の備への上杉方須田右衛門尉親満安田上総介
 山吉玄蕃允三備の軍勢齊しく鉄炮を釣瓶み放ちかけ其煙の下より鎗先揃へて突懸る武田諸
 角の軍勢まぢ設けたる事あれは咄哉花々敷一戦して我が勢の勇威を顯しくれんと全しく鉄
 炮うちかけ或の槍劍をふつて跳り出で駈あらび駈ちがひ此處に討あひ彼處に突あふ其烈し
 さ響えんに物なし斯て數刻合戦せしが上杉勢の勇やまさりたりん武田勢次第に崩れて見えけ
 るにぞ武田信繁大ひみ奇立ち東西に駈廻り采幣を振て士卒を下知する處を上杉勢ある松本

空助といふ者鉄炮もて夫が脇壺をうち抜
 信繁馬も耐得ず真逆様お落けるを空助走せ
 寄り首とかく武田が臣山寺妙之助是を見る
 より飛來りて松本を討仆し夫が首級と取返
 しぬ此時信繁が軍勢遂に敗北す諸角豊後守
 が備も大ひに崩れ立けるにぞ昌清怒り哮つ
 て郎黨二十余騎引具し敵の真中へ乗入り四
 方八面へ駈めぐり敵と討事麻を薙が如し然
 れど我身も數ヶ所の疵を蒙りければ甚だ弱
 りてある處へ須田が軍勢百有余人一度に供
 と討てかゝるに諸角今は是までありて死物
 狂ひに近寄る武者五六騎切て落し高松源五



郎とわたり合しが其鎗を受損じ脇腹突通されて落馬す高松が郎徒三四人走寄り其首とつて退くんとする處へ諸角が手勢石黒五郎兵衛外一人來りて夫を取かへし後陣へを退さける

○第三二回

是より双方の軍勢いよく勢ひ込みますく戦ひ烈しく武出方穴山伊豆守が備への上杉方本庄越前守繁長山吉玄蕃允が兵ども討て掛りしが穴山よく防ぎ戦ふて一步も退かず又原隼人佐昌勝武田太郎義信(武田方)が二備への柴田因幡守治時上田修理進景國が勢(上杉方)押寄せ來り數刻間挑み戦ひけるが原の軍勢遂に支えかね敗北しつれども太郎義信の父信玄は劣らる猛將をれば敵に背後を見せんより潔よく討死して名を汚さじと死力をふるつて戦ふはどに此備の勝敗更に分らざりし望月三郎信吉武田孫六入道道遠軒跡部大炊介勝資今福善九郎秀一淺利式部直信音(武田方)が五備の古志駿河守秀景宇佐美駿河守定行村上左衛門尉義清北條安藝守長明加地安藝守勝重が軍勢と交戦す斯りし程に兩軍の將卒共に必死となつて戦ふ其勢ひ猛虎破竹の如く矢叫び鉄炮の音の百千の雷一齋に落しかと疑はる馬蹄足

音の坤軸ふ徹し砂煙血煙の空中に朦朧として人の眼とくらませ敵味方を判するに難く其中に閃めく太刀の光りの龍火煙を吐て雲中を狂ひ廻るに異ならざる烈戦の中を争ともあさず山本勘助晴辛入道道鬼の敵に今日の謀略の裏をかかれ無念さやる方なければ如何よもして此禮儀を晴さんと思ふ折から味方追々敗軍とあつて諸將討死すと聞け今い是迄ありと調練の逞兵二百余人と引從へ本庄越前守(上杉勢)が軍勢のたゞ中へ跳り込み當るを幸ひ難廻りてさんぐと討惱せ猶柴田因幡守(上杉方)が勢へ荒入り勘助



親から騎馬武者六騎切て落し歩兵七十二人突仆し猛わたりて謙信が本陣目かけて駈向ふとやらじと上杉方の勇士本庄左馬介大太刀振て駈來り渡り合しが勘助の勇猛に敵難く既に危き處へ其從卒江間五郎太夫走り來り横合より勘助目がけ突懸る鎗を山本拂のんと身とかわす隙を見て左馬介夫が右肩先さり付たれば勘助拂ふに間なく馬より落し江間走寄て遂に首をバかさたりける爰にまた武田方の猛將初鹿源五郎の三百余人と將て山本勘助に引添ひ駈出しが敵將須田右衛門尉が勢に行逢ひければ暫らく是と接戦し初鹿親から敵兵三十人余り討倒し猶勇をふるつて戦ひしかと大勢に敵しがたく諏訪部某と渡りあひ遂に討死をぞあしたりける却説上杉謙信の軍懸りの陣にて武田勢の備に掛合せおき其旗本の軍勢もて親しく信玄が旗本へ討入らしむ武田が將士等爰を破られなば大將の大事ありと各一世の勇とふるひ防ぎ戦ふほどは流石の上杉勢も攻めぐみて次第亂れ立にける宇佐美駿河守定行大塚村に陣してありしが是を見るより陸奥味方の危急あるぞと一千余の士卒を下知して武田が旗本の横合より鎗と入れ無二無三に突立ければ武田勢敵し難く討るゝ者數を知らず上杉

勢是に氣を得て再びもり返り攻撃せむに武田勢或の敗走し或の踏止り心々に戦ふ處へ上杉方渡邊越守が兵共面もふらず討入ければ武田勢いよく敗して引退くを此首彼首お追つめ數なく討とりて瞬間に死骸の山をバ築さけるさる程は上杉謙信は親しく武田信玄に渡り合て雌雄を決せんと思ひ定め金の兜の忍びの緒を切て犀川へうち込み白練の絹もて針巻し信玄が將机備目がけて跳り入り支ゆる敵と難拂ひ討倒し其床几近く駈寄れと信玄兼て老人七人同じ打拵めて左右に侍せ置ければ何れが誠か見分難さ

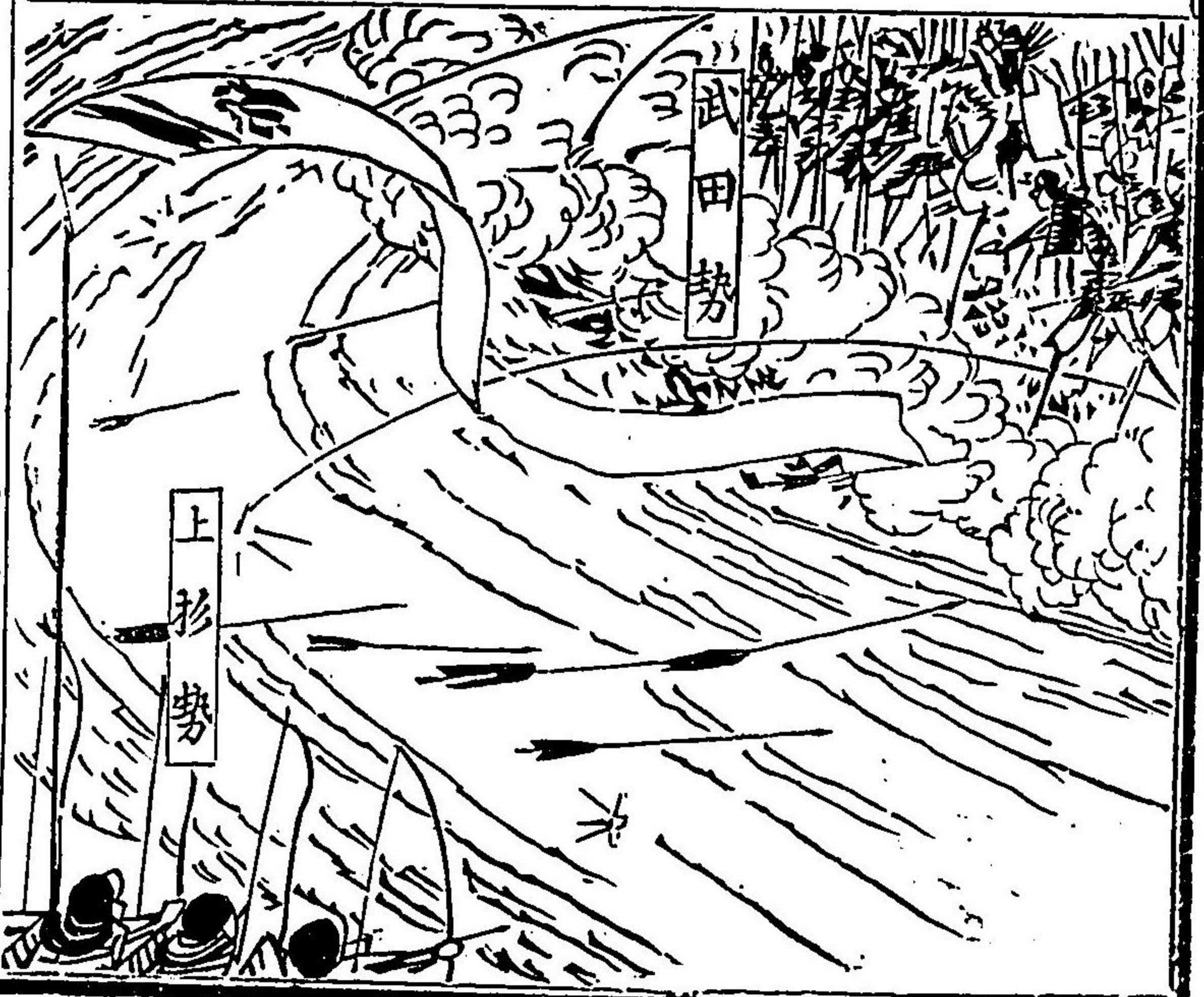


様なれど謙信先年和議の折よく面体を見とめたる故信玄の邊近く乗込み馬上より九度迄切
付る太刀を信玄床几に腰掛みながら軍配團扇もて受とめ猶たみかけて三太刀切こまれしを
受外し疵を装り既に危く見えたりけり

○第四回

時に武田方原大隅守左奈多源五郎等は見て大に驚き蕨直に駈寄て一番に原信玄が持鎗上
て謙信が總角と思ふ處と突けるに其鎧奇代の名器あれば實よくして裏かゝ大隅守奇りて
再び突かんとする處へ上杉方和田喜兵衛馬を乗入れ其鎗と拂ひ謙信と助けて引上げける斯
て謙信飯陣せんと彼方を見れば日の丸武田菱の旗立たる許は大将と覺し武將敗軍の兵
を集めて居る体に謙信さては太郎か左馬介あるかと會釋もなく乗込んで夫お扣ゆるに誰か
るぞと問は彼の大將我こそは武田太郎義信なれと云ひさき互ひに太刀ぬき合せ劍をけつり
火花と散して戦ひしが遂に義信十一ヶ所の手疵を負ひまた謙信も二ヶ所の深手とらけ双方
鎧を踏兼て既に組打よならんとせし所へ曾根周防守柴田彌太夫等駈來り謙信を支えしかば

謙信是迄ぞと近付敵三騎切て落し雜兵六人
に手を負す時に又和田喜兵衛來つて騎兵二
騎を切仆す此手並に恐れて敵兵左右近く近
付得ざる間に謙信馬を返して本陣へ引退た
り却て説西條山へ向ひたる武田が軍勢は今
宵こそ越兵を一揉み追崩し我軍の勇威を輝
りさめと勇み進んで其陣へ押寄たりしのみ
捨籌處々に焰々たるのみにて兵一人も見え
ざれば是ハ敵に出し拔れし事の無念さよと
いふ間もあらせず早河中島の聲火蓋の
音山河にひびき手あたる如聞えしかば驚破
合戦の前にあり追つて討破れと諸將一齊

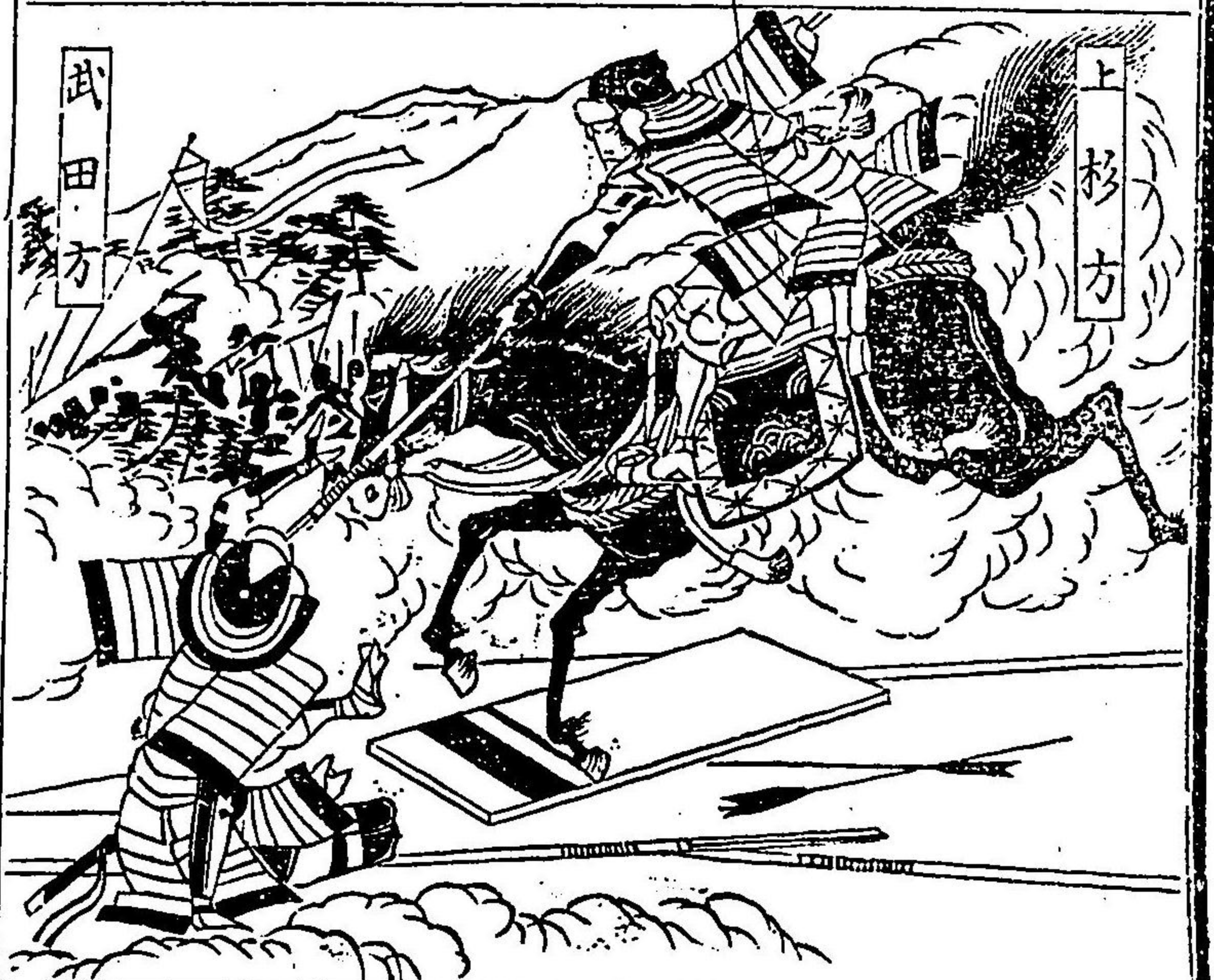


に馬を立直し雨宮の渡に駈つけ乗入らんとするにぞ向岸に待設けらる上杉勢直江山城守甘
 糟近江守が兵鉄炮をつるべりけて放てて武田勢忽地二三十騎うち仆され進み兼て見えける
 を小幡尾張守諸卒を屬まししく難なく向岸に駈上り先ふ進一越兵七騎を切て落す是あつて
 いて佐奈多馬場小山田はヒを一同川と別去え敵軍目かけて進撃す上杉勢些も騒かず先手を
 左右へ分ち進む武田勢を兩方より突伏々々手を碎て戦ふ程お左右あくも破り難く攻むぐみ
 て見えたりけり馬場民部少輔味方を駈ぬけ敵の弓手も廻り手勢一同に歩立とあり小荷駄を
 目がけ走入り馬足を切て落せば數百の荷馬直江甘糟が隊中へ飛込み狂ひ廻るにぞ越軍周章
 狼狽と見すまし透さず甲兵一同に勇を鼓して進撃しければ直江甘糟の軍勢遂に遮る能はず
 四度路よあつて敗走するを乗越え駈ぬけ馬場小幡左奈多等の兵卒越軍の戦將須田右衛門尉
 安田上總之介が備へ切て入りしが須田安田の兵必死とあつて防ぎ戦ふ程に暫しの勝負も見
 えざりけり干茲武田方の猛將飢富三郎兵衛の我軍稍敗すと雖も驚かず増々備を堅固あして
 敵の先鋒柿崎和泉守が兵を追まくり本庄越前守が軍勢と接戦してのりしが西條山へ向ひし

味方の駈り来るを見て頃味方の先手敵の背
 へ追りたれば軍の味方必勝あるぞ狹討にせ
 よと下知しけるにぞ士卒いよく勇氣加ひ
 り鎗ため直し太刀を延べ進みに進んで戦ひ
 ければ越兵前后的敵よさしはさまれ上田修
 理之進を始め名たる勇士數多く討死し流
 石の上杉勢も總敗にぞ及びける

○第五回

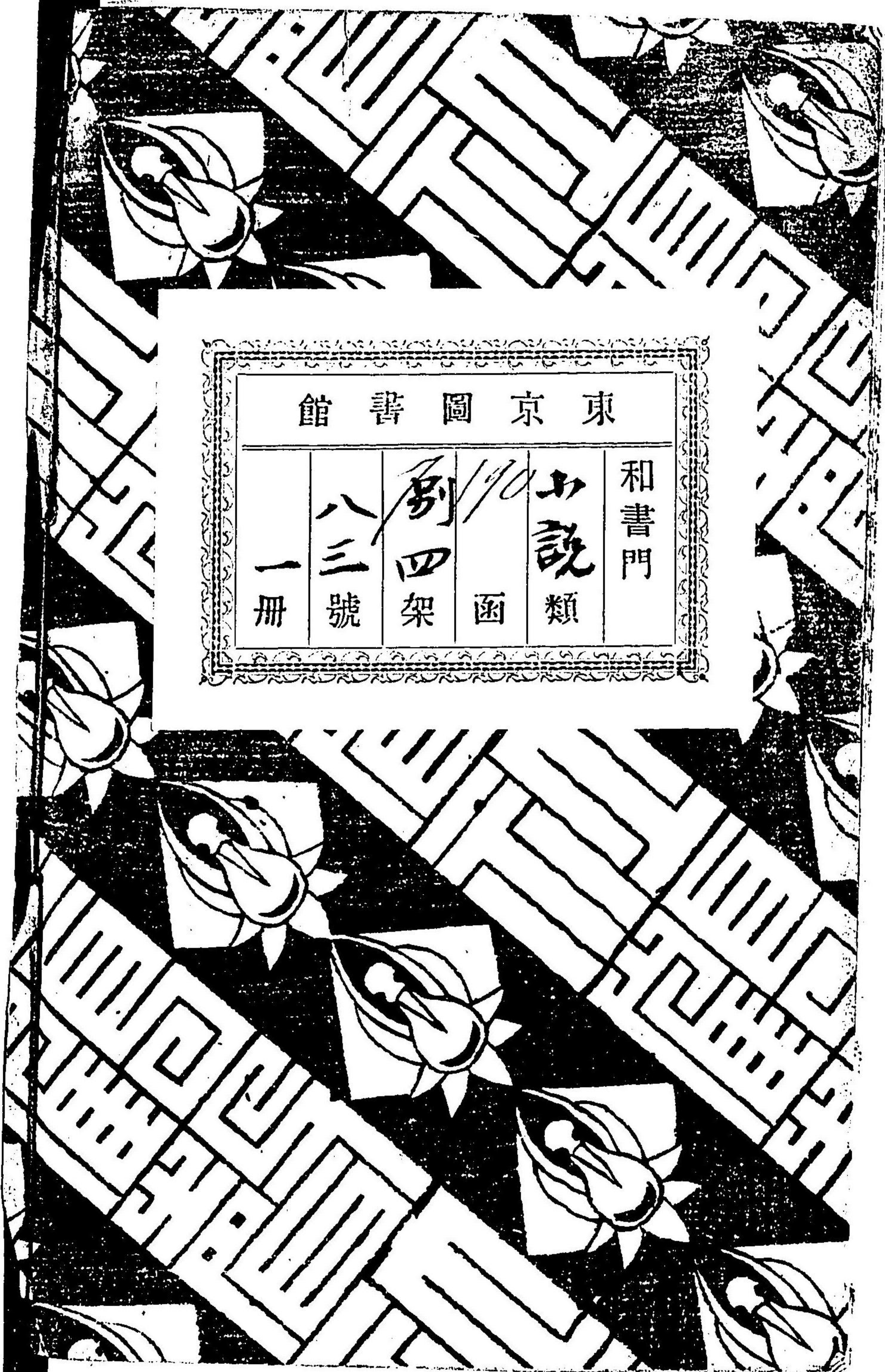
當下上杉謙信本陣に乘駈り休息して在しが
 味方の苦戦するを見やり軍の大事と成たる
 ぞ我十分に勝すと雖も年來の鬱憤零晴たれ
 ば疾歸國すべし皆用意せよと下知あつて程に



宇佐美駿河守自ら此由諸陣へふれ知せ本庄柿崎村上柴田等と共に力を合せ漸く一方の血路とひらきて大將と守護し引上げんとする折から武田太郎義信過刻の一戦におくれと取しかば其仕返せんと手勢八百余騎を卒し謙信が旗本目かけ眞一文字に切て入る是を見るより甲州勢太郎殿を伐たすも謙信公を伐取れよと總軍齊しく呼りつ越兵を真中にとり囲み一方有余の兵大山の崩るゝが如き勢ひにて前後左右より駆入り切込ほひどに上杉勢心の彌勇にはやれども曉よりの接戦に太刀折れ鎗たのみ大川駿河をはじめ多くの勇將討死あし稻葉彦六半川平太夫あんと絶世の剛士の重傷とうけたればいよく勢ひ挫けてさんくお乱れ立ち遂に総敗軍となりて犀川の方へ推あだれ氷に溺るゝ兵卒數を分たす謙信馬上に是を見てはや師も是までとむかふ騎兵十三人手の下に切て落し馬に一鞭加はて犀川へ乗入り難あく向岸に上つて味方の勢を待所へ武田方長坂長閑手勢を卒して追來り是を取圍む越軍の勇士和田喜兵衛宇野左馬之介飛鳥の如く河をはね越え來つて大將を助け落さんと一つれども謙信が乗馬數刻の闘戦に痛手を負ひ立すくもて進まねば左馬之介我馬へ謙信を乗せ自ら歩立

となり和田喜兵衛と共に力戦して辛く血路を開き主従わづかよ三騎高梨山へひき行と長坂が兵猶追來れば左馬之助踏止まつて其兵と遮りとめ花々しく奮戦して遂に討死したりけり其隙に上杉謙信只和田一人を従へ高梨山を過ぎ本國へぞ引とられける長坂が兵士の謙信を討もらせしかど其乘馬を得にければ是ぞ敵の大將謙信が馬なり追撃して奪ひ取たりと高らかみ呼ばりつゝ又犀川を渡り味方の陣へぞ入にけるさる程お漸く合戦も終りにければ武田信玄陣列を整へ首級を檢し戦功を録し三たび凱歌をあげて目出度甲府へ凱陣したけり附曰此戦争の味夾卯刻に起り申の下一刻に終る然して武田勢上杉勢の首を獲る事三千百有余級ありしといふ實に古今未曾有の劇戦と謂ふべし

實説 河島軍記終



東 京 圖 書 館

一 冊	八 三 號	別 四 架	190 函	小 說 類	和 書 門
--------	-------------	-------------	----------	-------------	-------------

實說川中島軍記全
双紙



特42
850

205105-000-9

特42-850

河中島軍記 (実説双紙)

梅亭 金香 / 編

M17

EDV-0109

